

ドウヴァンク先生遺文

月村 辰雄

ジャン＝クリストフ・ドウヴァンク先生は昨年8月19日、夏期休暇でフランスに帰国中、フォンテーヌブローの森で交通事故に遭われ、命を失われた。葬儀は8月27日、パリのペール・ラシェーズ墓地の斎場で執り行なわれ、茶毘に付された御遺骨は同墓地の納骨所に収められた。

あき夫人と愛嬢ポーリーヌは9月2日に帰国され、10月12日に神田一ツ橋如水会館において催された先生の追悼会に臨まれたあと、早くも11月17日にはパリに向けてお発ちになった。先生は日頃、一人娘ポーリーヌの教育に心を砕き、これをフランス風に行なうことをお望みになっていた。夫人は先生の遺志を継ぎ、ポーリーヌにフランスでの学校教育を授けるべくお戻りになったのである。ちなみにこのプレノンは、先生が愛されたコルネーユの劇にちなむ。

先生には双子の兄弟であるティエリー氏がある。パリ4区オテル・ド・サンス内の市立図書館に司書として勤務されているが、先生と趣味を同じくされ、やはりお子さんにはコルネーユ劇にちなんでプレノンをおお喜びになっている。よく似た兄弟であった。御結婚前、先生はしばしばティエリー氏のことを口にされた。また、夏期に帰国されると、オテル・ド・サンスに通ってティエリー氏の用意する特別席で仕事をされるのを通例とした。私は一度、先生ともども、悲運のマルゴ王妃にゆかりの館の内部をティエリー氏に詳しく案内して貰ったことがある。そのあと、オテル・ド・ヴィルの真向かいの豪勢な建物にあるパリ市職員食堂で昼食をともにしたのであったが、その間、先生とティエリー氏の息のあった意思疎通は、並みの双子の域をはるかに越えていた。

兄弟以上の僚友ともいべき先生の死を悼まれたティエリー氏は、昨年9月に来日。先生が残された私物を整理するために、あき夫人とともに研究室にお見えになったが、先生の机と、窓の外に広がる三四郎池をしばし見つめたまま、再びこの風景を目にすることはないだろうとつぶやかれた。それは、なにごとかに別れを告げるかのようであった。そのティエリー氏から後日連

絡が入り、遺品の中に短いものではあるがジャン＝クリストフの原稿が見つかった。フランシス・ポンジュについて書こうとしたものらしい、という。それが以下に掲げる先生のエッセーである。なお、無題であった原稿に当方で Sur Francis Ponge と題名を付けたほか、いっさい手は加えられていない。

ドゥヴァンク先生が年少の頃から愛したものはラテン語と古代ローマ文学であった。リセの時か、あるいはクラス・プレパトワールの時か、日曜には終日自室に閉じこもり、ギヨーム・ビュデ叢書をあれやこれやと読みふけるのがなによりの楽しみであった、とお聞きしたことがある。また、エコール・ノルマル・スーペリウールに進学後、リサンスの課程ではローマ時代後期の碑文研究に志された。ふつう C. I. L. と略記される『ラテン語碑文大全』という膨大な資料集がある。ラテン語研究の奥の院、と称してもよいかもしれない。かつてのローマ帝国の各地から発掘される墓碑銘などを集大成したものだ、先生はしばしばその中に載る各種のラテン語不純語法の不可解さを、なつかしげに口にされた。

私が初めて先生に紹介されたのは、1989年夏、フランス語フランス文学会が志賀高原で毎年催した夏期スタージュの折、委員として二週間の山籠もりを余儀なくされていた時であった。先生は講師として見えられた。ちょうどヨーロッパの接吻について一文を草する必要があつて、暇を見つけて書き継いでいたが、題材が題材であるから材料不足で、私は初対面の先生に面白いネタはないかと尋ねた。すると先生はたちどころに、セルヴィウスがウエルギリウス注解の中で接吻に面白い4区分を施している。なに、いちいちセルヴィウスを探す必要はないので、東京に帰って『テーサウルス・リンガエ・ラティナーエ』のしかじかの項目を見れば、原文がしかるべく引用されている、と教えてくれた。断っておくが、このような知識はなにかの書物に載っているという種類のものではない。本場のラテン語研究の膨大な研鑽の余暇にたまたま手に入れた珍しい知識を、惜しげもなく恵んでくれたものであつたらう。私は今、長いあいだ同僚でありながら先生の知識を十全には活用しなかった自分の怠惰を、悔いている。

そのドゥヴァンク先生がポンジュについて文章を残していた。意外であるかもしれない。しかし、その後先生が哲学に転じ、現象学研究に赴かれたことを思えば不思議ではない。いや、短い文章ではあるが、いたるところ先生の肉声が響いているとも考えられる。ポンジュの作業を、はじめ先生は「文の言い回しを通常の用法からわずかにずらすこと」と見極める。言葉の問題

である。先生の愛した17世紀の作家やローマの詩人たちのミメシスが退けられ、これもまた先生が好まれたに違いないリトレの辞書の語法の列挙に不満が申し立てられる。ここで、「ボンジュが最初の著作を刊行した時代のある名高い形而上学」が言及され、その後「もの」とはなにかという問いが発せられて、その「もの」が突きつける圧倒的な力と受けとめる私たちの意識の虚無との対比へと話は発展する。ここにはなにか先生の生の軌跡といったものがあらわれているような気がするのだが、はたしてどうだろうか。私は今、ふたたび、どうして先生が現象学研究へと赴かれたのか突き詰めて尋ねたことがなかった自分の怠惰を、追悼の文章を綴る友人として悔いている。

最後のパラグラフは、新しい論点へと転じ、ボンジュの詩作における二つの時期を対比させている。たしかにパラグラフとしてはまとまっている。しかし、これは全体に締めくくりをもたらす結論として意図されたものではない、という印象を抱かざるを得ないであろう。いったい、先生はこの後になにを続けようとしていたのか？ また、先生はこの文章をどのような目的で書き始めたのか？ そのような疑問を投げかけるような、突然の中断である。ちょうど、先生の死のように。

ドゥヴァンク先生は、他人を押しつけて世に出ようという野心からもっとも遠い、恬淡とした人であった。その父親ぶりもまた、私の目には、愛情の押しつけがましきのない、銀の時代のローマ詩人を読んでいるような爽快なものに映った。ポーリーヌはまだ幼く、追悼会でも会場の片隅で駆け回っていた。あき夫人によれば、それでも父親の永遠の不在はおぼろげに理解し、ただそれを自分に言い聞かせることが嫌さに、かえって常になくはしゃいでいるようだという。そんなポーリーヌのために、最後に日本における先生の経歴を書き記しておきたい。

ドゥヴァンク先生は1956年9月4日生まれ。本籍はオ・ド・セーヌ県クリシー＝ラ＝ガレンヌ。リセ・ラブレール、ついでリセ・ジャンソン・ド・サイイのクラス・プレパトワールを経て、1978年エコール・ノルマル・スーペリウールに入学されたのち、パリ第4大学においてラテン文学および碑文学を専攻された。

1983年4月には、慶應義塾大学文学部外国人教師として来日。88年9月、求められてパンゲ教師の後任として東京大学教養学部外国人教師に転じ、さらに91年4月、ブロック＝坂井教師の後任として同文学部外国人教師の職に移られた。文学部では学部授業として Etude de texte および

Exercices pratiques、大学院授業として Etude de texte をお持ちになることを通例とし、後年はこれに加えて Dissertation française の授業を御担当になった。

先生はフランス文学全般にわたって深い学識を有し、その授業の語り口は緻密で論理的なうえに、時にシニカルなエスプリにも富み、まさにフランスの伝統的な知性を体現されていた。また先生は、近年、大きな教育的成果を挙げつつあった。すなわち多数の教え子が留学生として渡仏し、博士論文を仕上げた上で帰国。各地の大学に教職を得てフランス語ないしフランス文学の教育に当たっている。その多くは先生の授業によって初めてフランス語に接し、またディセルタシオンの手ほどきを受けたのであり、いうならば先生の声とスタイルとを引き継いでいるのだ。今後彼らは授業を通して、若い学生たちに先生の声とスタイルのなにかを伝えることになるであろう。だからポーリーヌは、おぼろになった先生の声がなつかしくなったら、いっそ日本を訪ねればよいのだと思う。

私は最後に先生のために、ラテン語の有名な墓碑銘を掲げたい。もちろん『ラテン語碑文大全』にもあらわれるものであって、先生も親しくお目にされていたに違いない。

SIT TIBI TERRA LEVIS.